

◇ 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

日本でも一九八〇年代にはさかんに国際化^①が必要であると言われました。その場合の国際化の内容は、ある意味ではアメリカや西ヨーロッパの近代世界が発達させてきた物事の基準に適合させることでした。国際化への適合の必要というのは、日本の文化と社会がつくりあげてきた欧・米型とは違ったシステムを、アメリカや西ヨーロッパの持ついろいろなシステムに適合させなくてはならない、という意味で言われました。

いろいろなレベルで国際化という言葉が使われるにしても、その基準は、たとえば日本にとっては、自由主義世界の欧・米がつくりだし、しかも日本が参加することによって利益を受けると思われるような経済・金融市場化であり、人権や民主化といった言葉で表される政治システムであり、科学技術の発達をいかに利用するかという点での国際的な基準といったことでした。日本も一部はその発達に貢献しつつ、日本的なシステムをそれに合わせていこう、あるいは合わせなくてはいけないという動き^②であったのです。

つまり、日本が国際化と言った場合には、旧ソビエト圏や中国は視野に入っていなかったわけで、適合させなくてはいけないモデルやシステムとしてそれ^③らの国々や地域や社会を捉えることは、全くなされませんでした。ですから、社会主義圏には社会主義圏の中での国際化があるというように了解されていたことになります。ロシア・システムや中国システムということなのでしょう。私はタシケント^{*}で、ロシア・システムの作用を目の当たり^まにしました。これからはむしろアメリカ・システムに変わるといいますが、言葉も含めて、そこに働くシステムはロシア・システムでした。

A、東西のイデオロギー対立がなくなった一九九〇年代には、国際化という場合にも、ソビエト圏であれ東欧圏であれ等しく守らなくてはいけない、あるいは達成しなくてはいけない世界のモデルがある、と認識されてきました。そこで出てきた言葉がグローバル化、全地球を覆う形での展開と捉えられる言葉です。グローバル化という言葉には論者によってさまざまに異なる意味が付与されていますが、この言葉が広く使われるようになったのには、^④そうした背

景があると思います。ですから、グローバル化も近代化という大きな流れの中から出てきたものにはちがいません。

ただ、国際化、さらにはグローバル化が求められる世界はこの十数年のことです。特に新世紀に入ってますますグローバル化という言葉が使われ、またグローバル化に即した対応を各国、各社会が迫られるという点では、近代化と言われたときよりも強い大きな意味を持つようになっていきます。しかし同時に、一九九〇年代に始まる世界の変化の認識は、人間と社会の現実には文化的に多様であり、社会も民族も言語も非常に多様であるということです。それがグローバル化の中で初めて強く認識されたということもまた事実なのです。

すなわち、世界を同じシステムにしようとするグローバル化の流れの中で明らかになってきたことは、「文化の多様性」の認識であるかと思います。人間の世界は、表面的には科学技術の発達を共有することによる共通化あるいは一様化という現象が加速されてきたように見えますが、同時に「文化の多様性」もまた根強く存在するということが言えるでしょう。B化が進めば進むほど、文化の違い、価値の違い、生き方の違い、それぞれが目標とするもの、違いも明らかになってきました。

⑥ グローバル化は、欧・米的なシステム、特にアメリカ的なシステムで世界を統合しようとする動きとしても強く表れています。それはハリウッド的なポピュラー・カルチャー、ファッションやファストフードなどの料理、さらには知識・学問、そして軍備や政治思想といったものにまで至ります。それに対する反発もあって、グローバル化といえればアメリカ化だと言う人も多いわけです。グローバル化が多様性と共存する方向に向かわずに、どちらかというに一様化、画一化に向かうことへの危機感が世界各地に非常に強くあり、日本の中でもそれを指摘する人もいます。

(注) タシケント…ウズベキスタンの首都。古くはロシア領だった。
(青木保「多文化世界」より)

問一 ——— 線①「国際化」とあるが、一九八〇年代の日本の国際化を次のようにまとめた。□に入る語を、本文中から十一字で抜き出して答えよ。

日本の文化や社会のシステムを、

のシステムに適合させ

解答

- 問一 アメリカや西ヨーロッパ
 問二 エ
 問三 旧ソビエト圏や中国
 問四 イ
 問五 イ
 問六 文化の多様性
 問七 グローバル
 問八 アメリカ化
 問九 例グローバル化が一様化、画一化に向かうこと。(二十一字)
 問十 ウ

解説

問一 一九八〇年代の日本にとって、「国際」とは「全世界」ではなく、特定のどの地域を指していたのかを確認しよう。また「く化」とは、どういう意味を表していたのかを捉える。

問二 「動き」の内容を、第二段落全体から読み取ると、次のようになる。

日本も、その発達に貢献しつつ、それに合わせなくてはいけないという動き^Ⅱ 自由主義世界の欧・米がつくりだした政治・経済・科学などに関する国際的基準^Ⅲの発達に、日本も役立ちながら、適合していかなくてはいけないという動き

問三 指示語の指す内容は、それより前の部分にあることが多い。

問四 第一く第三段落は、「アメリカ・西ヨーロッパ（西側の自由主義世界）」と「旧ソビエト圏・中国（東側の社会主義世界）」それぞれの国際化について述べていたが、第四段落では、東西のイデオロギー対立がなくなった後の全地球での国際化（グローバル化）の説明となるから、相反する内容をつなぐ「逆接」の接続語を選ぶ。

問五 ここでいう「背景」とは、歴史的背景のことであるから、東西二つに分かれて展開していた世界が、全地球を覆う形での展開となったことを指している。

問六 認識したのは、——線⑤の直前の「人間と社会の現実には文化的に多様であり、社会も民族も言語も非常に多様である」ことである。同じことを、——線⑤の直後の文で、六字の表現に言い換えている。

問七 「文化の違い、価値の違い、生き方の違い、それぞれが目標とするものの違い」とは、すなわち「文化の多様性」であることから考える。

問八 「グローバル化」を唱えながらも、結局はすべてが「アメリカ的」になっていくことを批判した言い方である。

問九 ——線⑦の直前の「グローバル化が……に向かうこと」の部分をも、要点を押さえて簡潔にまとめる。主語「グローバル化が」と、述語「向かう」を必ず入れて、文末を「〜こと。」の形にする。

問十 ア 「各国・各社会の文化の違いが明らかになった」

〈その結果〉「グローバル化が進められた」のではなく、
「グローバル化が進められた」

〈その結果〉「各国・各社会の文化の違いが明らかになった」

という因果関係であるから、不適切。

イ グローバル化により文化の多様性が明らかになったのであり、画一化されたわけではない。

ウ アの解説にもあるが、グローバル化が進んだ結果、各国、各社会の文化の違いが明らかになり、多様性が重要だと考えられ始めている。

エ グローバル化が進む中で、アメリカ的なシステムでの統合の動きが強いとの記述はあるが、欧米に偏らない文化統合については触れられていない。